『新潟県植物保護』に望む

笹 川 通 博

本誌『新潟県植物保護』は今回で第6号となり、1987年創刊以来、3年間続いている。それ自体は大変喜ばしいことである。内容は県内のすぐれた自然の紹介や、自然破壊の報告、新聞の切りぬきなどが中心である。自然保護に関する情報を関心のある人に広く知らせるということで、こうした内容は意義がある。

自然保護の必要性は認めるが、実際の行動となるとためらいを感じる、という人に何人かお会いしたことがある。話をお聞きすると、人間の生活の維持、すなわち経済的な問題と自然保護との間に大きな矛盾を感じておられるようである。こうした方々は、大変多いのではあるまいか。そういう筆者もその一人なのである。

本誌は情報交換誌として大きな意義を持ち、こうした性格は今後とも維持していくべきであろう。しかしそれだけでは物足りないと思のである。先に述べたためらいを解消することはできないであろう。このままでは自然保護への関心は薄れていくのではあるまいか。そこで筆者は、自然保護へのためらいを感じている人にも大いに投稿して頂きたいと思うのである。今までの情報交換誌としての性格に「自然保護」そのものを考える場としての性格を付け加えて欲しいのである。

本誌もそうであるが、自然保護の運動は「生命の尊厳」といった感情的な面に訴える所が大きいと思う。それも大切なことではあるが、それだけでは足元がおぼつかない。マス・コミュニケーションによる流行として終ってしまうのではあるまいか。こうした面が最悪の状態で表われたのが、某新聞社による記事の捏造事件であると思う。自然保護運動を人間も生活するという現実をみすえた、足元のしっかりしたものにしていかなくてはならない。ささやかではあるが、そのための討論の場として、本誌が機能することを望むのである。

（新潟県立向陽高等学校）

読書案内

菊 沢 喜八朗 著

「北の国の雑木林：ツリーウォッチング入門」

蒼樹書房 ￥2,300(旧価)

落葉広葉樹は当然のことながら、ある時期に葉を落とす。それは気候の厳しい冬に入る直前におこると思うのが一般的であろう。ところが、本当にそうであろうか。常緑樹ではあるが、クスノキが夏にはらはらと葉を落とすのを見て不思議に思ったことがある。しかし不思議に思ったというだけで、そのことに関して観察なり研究なりをするまでにはいまだに至っていない。

北海道の林業試験場に勤める本書の著者は、ハンノキ属の内、ハンノキ亜属では夏に多くの葉が落ちるのに対して、ミヤマハンノキ亜属では夏の落葉が少ないことに気づく。そこで、早朝の通勤の道すがら、何種類もの木々の開く葉と落ちる葉の数を根気よく数える。その結果を基に、カバノキ科の進化やさらには落葉広葉樹の生活全体について、考察を広げていく。本書では読者と一緒に考えるという形で、こうした研究の過程を分かりやすく述べている。

その植物学的内容もさることながら、何よりも、自然を見つめる著者の真摯な態度に心を打たれる。すぐれた観察眼と深い考察があれば、何も複雑な器具を使わなくとも、新しいことの見つかる可能性はある。たとえ新発見でなくとも、普段見慣れている自然から多くのことを知ることができる。この本からはこうした、自然を見つめる態度を学ぶことができるであろう。小さな発見や疑問を大切にしていきたい。

笹 川 通 博